

芦屋大学論叢 第75号  
(令和3年7月27日)抜刷

《研究ノート》

「子どものネット問題研究」の出発点と今後の課題

竹 内 和 雄  
安 東 茂 樹



## 《研究ノート》

### 「子どものネット問題研究」の出発点と今後の課題

竹内和雄  
安東茂樹

#### 1 本稿の目的

筆頭著者の私は、現在大学で教職を担当している。「困っている子どもへの対処方法」を専門に研究を進めているが、問題意識の中心は、「子どものネット問題」である。この問題の研究に取り組むようになって15年以上経過しているが、ここでネット問題研究のこれからの課題を探るべく、自分の「出発点」について振り返ってみたい。そのうえで、これからの研究の方向性について考察することを本稿の目的とする。

#### 2 きっかけ

私の「子どものネット問題研究」の出発点は2005年に起きた「教職員殺傷事件」である。この事件は、私が勤務していた校区内にあった小学校で起きた。以下の資料は、事件の翌日の朝日新聞大阪版朝刊に掲載されたものの一部である。なお、以下の記載では、地名及び個人名についてはA、Bなどを使用する。

##### 資料1 『17歳少年が小学校で教師刺殺』2005.02.15 朝日新聞大阪朝刊 35頁 社会面<sup>1)</sup>

小学校の校舎でまた、惨事が起きた。Aの市立B小学校で14日午後、刃物を持った17歳の少年が教職員3人を次々と刺し、うち5年生担任のCさんが亡くなった。校内に非常ベルが鳴り響き、校庭に避難した児童たちは「怖かった」と青ざめ、我が子の無事を願って保護者たちが駆けつけた。01年の大阪教育大学付属池田小学校の児童殺傷事件後、学校現場では様々な安全対策が進む。そんな中での犯行に、大きな衝撃が広がった。※一部修正して掲載

「17歳の少年」（以下、Dと記す）は、中学3年生当時、私が学年主任を担当していた学年に所属していたのだが、私はその学年を中学3年生になってから受け持った。受け持った段階で、Dは学校に不登校になっていたため、Dとの直接の面識はない。また、殺害されたCさんと私は親交が深く、亡くなる直前、共通の教え子と会食を共にした。つまり、私の教え子が私の友達を殺害したのである。

Dの学年を受け持っていた当時、学校ではいろいろなトラブルが起きていた。暴力行為やいじめなどのトラブルも多発していたため、学年主任の私はそういうトラブルの事後指導をすることが多く、「Dのような不登校生への対応、ケアが十分ではなかったかもしれない」という自責の念が強くなった。

また、事件当時、私は生徒指導主事を担当していた。学校全体のトラブル対応の中心として対応することが期待される役割であったが、事件発生当時の中学2年生は、亡くなったC先生に小学校時代にお世話になった学年である。「うちの子は、不安定だった時期をC先生の対応をきっかけに立ち直った」等と語る保

護者が多数いた。そういう生徒たちが不安定になった。直接の因果関係はわからないが、不登校やいじめ、暴力行為等が目に見えて増えた。このようなトラブル等のすべての原因が自分のDへの対応不足ととらえ、私自身が精神的に落ち着かなくなった。生徒指導担当の不安定さは生徒に伝播したようで、生徒のトラブルがその後も多発した。当時の同僚から「C先生の忘れ形見の命を守るのがあなたの残りの命の使い方です」と言われて、退職を踏みとどまった。C先生は事件当時、小学5年生の担任であった。それ以来、「忘れ形見」の中学校進学してくる2年後までに学校でのトラブルをできるだけ減らすことが私の使命になった。

### 3 15年後に振り返って

以下の資料2と資料3は、朝日新聞のインタビュー記事である。記者が私へのインタビューをもとに、事件当時から今までを振り返った内容を記載したものである。

#### 資料2 『竹内准教授の原点：上「なんとなく」に向き合えたか』2020.09.02 朝日新聞大阪朝刊 兵庫 22頁<sup>2)</sup>

いまから15年前、大阪府内の小学校で、卒業生の10代少年が学校を訪れ、そこに居合わせた教職員3人を殺傷する事件が起きました。私は当時、その小学校の校区を含む中学校の教員でした。少年は、私の勤務していた中学校の卒業生でもあったのです。少年を私は知っていました。彼の在籍していた学年の学年主任だったからです。学校生活に課題のあった少年の家庭を担任教師が訪ねる際、私も同行しようと声をかけたことがあります。しかし、実際には様々な生徒指導上の問題に対応することに追われ、結局、少年が卒業するまで一度も訪問できませんでした。事件で亡くなった教諭（当時52）と私は、校区の小・中学校の教職員が子どもたちの支援について話し合う会議で一緒でした。私はクラス担任を持たない生徒指導の担当でもありましたから、当時、小中連携で子どもを支える取り組みを始めていたのです。小学校からは、その先生も参加してくれていました。

偶然の出会いでしたが、教員の先輩でもあるその先生に尊敬の念を抱きました。事件の少し前に居酒屋で飲みました。その時、先生がある教え子の話をしました。その子は当時私の中学校に在籍していました。先生は「あの子は問題児じゃない。血の通ったええ子なんや」「竹内さん、子どもらを頼むわな」としきりに言い、私の手を握りました。

先生に会ったのはそれが最後だったと記憶しています。彼の手のぬくもりは、今でも忘れられません。事件後、私は学校に行けなくなりました。玄関で、靴に足が通らない。家族によると「俺のせいや。もう教壇には立たれへん」と言い続けていたそうです。私が少年の中学時代に家庭訪問をちゃんとしていれば、あるいは何か行動を起こしていれば、事件につながる芽をつむことができたのではないか。自責の念に苦しみ、事件後しばらくして、辞表を書きました。当時の同僚から「亡くなった先生の忘れ形見の子どもたちを守るのが、お前の残りの命の使い方やろ」と諭されました。悩みましたが、もう一度、責任を担おうと決意しました。

事件後の地域は騒然としていました。事件直後、校区には府教育委員会からカウンセラーや指導主事が応援に駆けつけてくれました。事件を連想させるような言葉は当面、子どもたちの前で使わない方がよいという話を聞き、私はそれを文字通り守り通しました。やがて、亡くなった先生が担任をしていた学年の子どもたちが中学校に進学してきました。入学後の早い時期から、生徒たちの問題行動、特に荒れた行動が散見されるようになりました。そうした行動の背景を探ると、携帯電話、つまりインターネットの影響が見え隠れする事例が少なくないことに気付きました。

生徒たちに携帯電話を見せてもらおうと、中・高生の間ではやっていた「プロフ」と呼ばれるモバイルサイト上の自己紹介ページや、「ホームペ」と言われる携帯電話向けの個人サイトなどがありました。これらに悪口を書き込まれていじめや暴力に発展したり、子どもを食い物にしようとする大人たちとの出会いの接点になったりする事例を知り、衝撃を受けました。事件の影響なのかどうかはわかりません。でも、強く感じたことがありました。それは、「なんとなくさみしい」「なんとなく生きにくい」という子どもたちの気持ちを私たちは放置してきたのではないかということ。そういう子どもたちの気持ちが、はけ口を求めてネットの世界に向かっているのではないか。

事件を遮断するのではなく、例えば、亡くなった先生の名前を呼び、みんなで一緒に大声で泣いていたらどうなっていたか。傷ついた子どもたちが思いのたけをぞんぶんにはき出せる場を大人はちゃんと設けてきたか。自問自答しました。いずれにしても、表出した子どもたちの問題行動に事後的に対応するだけでは、本当の解決にはならないと感じた出来事でした。※一部修正して掲載

### 資料3 『竹内准教授の原点：下 困ってる子が頼れる大人に』2020.09.03 朝日新聞大阪朝刊 兵庫 20頁<sup>3)</sup>

生徒の荒れた行動や生徒間トラブルの背景に、インターネットの世界があることを知りました。ネットに居場所を求める気持ちが何から発しているのか。日々抱えている心のモヤモヤを子どもたちが話し合い、解決する方法や場を用意する必要があると思いました。

生徒会に「どうしてみんなイライラしているのかな？」と投げかけてみると、世の中の人たちがどんな方法でストレスを発散しているのか調べてみたい、と言い出しました。生徒らは早速、駅前インタビューをしました。集まった多くの街の声から、生徒たちは「何歳でも好きなことをするのが大事」と朝礼で全校生徒に向けて発表しました。

校区の小学1年生を遊びに連れて行く「仲良し遠足」を、中学1年の生徒たちと企画しました。中学生は頼られることがうれしかったのかも知れません。遠足後1週間は校内トラブルがありませんでした。小学校に悩み相談ポストを設置。小学生の悩みに中学生が答えました。「好きな人にあそぼって言えません。どうしたらいいですか」「中学の部活の先輩は怖いですか」「勉強は難しいですか」。質問の答えを中学生が一生懸命考える。誰かの悩みに答えることは気持ちを言語化する作業であり、自分自身へのメッセージになります。回答者の名前入りで生徒指導だよりに掲載、小中学校と地域住民に配布。それを読んだ地域の人が、生徒を褒めてくれることもありました。子どもをネットから遮断するのが難しい以上、子どもたち自身がネットを安全に使えるルールを考え、作り上げていくのが最も効果的だし、自然な流れです。

生徒たちは「携帯3カ条」を考え、全校生徒に広めました。「メール終わらせ言葉」も決めました。「返信不要」と書くことで、メールの往復を止める合図にしようというのです。あまり実用されませんでした。生徒らは対策を練る過程で、お互いの困っていることを知ることができ「結果的に大成功」と言いました。このあたりがネット問題の答えだと確信しました。

事件から2年後、私は市教育委員会の指導主事に異動しました。一つの中学校区でしかできなかった取り組みを、市全体に拡大するチャンスでした。市内全中学校の生徒会メンバーでいじめやネットについて話し合う「中学生サミット」が毎年開催されるようになり、今も続いています。問題解決のカギは、生徒たち自身が握っている。解決への取り組みと研究をさらに全国へ広げたい。そんな思いもあり、5年後に大学教員に転じました。※一部修正して掲載

#### 4 不安定な子どもたち

小学校時代に担任の先生を亡くした子どもたちの進学先の中学校で、私は生徒指導担当として彼らを迎え入れた。事件の影響かどうか不明だが、中学生になった彼らは不安定な様子だった。

図1は、2006年の私自身の「生徒指導メモ」からの作成したものである。「生徒指導メモ」は、私が生徒指導主事として対応した事案についての備忘録であり、そのうちの中学1年生（C先生の最後の教え子たちが在籍した学年）の暴力行為と器物破損をまとめたものである。備忘録であるので厳密な定義はなく、「暴力行為」は「生徒間暴力や対教師暴力等、

生徒が暴力をふるった事案」で、「器物破損」は「生徒が故意に物を壊した事案」である。また私が関わった全ての事案を記載しているため、軽微なものから重篤なものまで様々である。警察対応を含むものから、私の個人的な指導で完結して学校等の生徒指導の記録には残っていないものまで様々である。

入学直後から不安定な生徒たちであった。4月1ヶ月間で「暴力行為」が40件起きた。私は当時の生徒指導の考え方に従って精一杯対応した。本人に対しては「毅然たる態度」で厳しく説諭し、基本的に保護者を呼び出して、親子ともに深い反省を促した。また、校区内にあったA警察署に頻繁に相談に訪れ、朝礼等警察官に「暴力は犯罪」ということを厳しい口調で話してもらった。指導に従わない場合は、電話してパトカーでサイレンをならして学校に来てもらったことも複数回あった。さらに、実際に警察署に呼び出して説諭してもらうことも何度もあった。被害者から「被害届」が警察に出される事案も発生し、家庭裁判所や少年サポートセンター、少年鑑別所等にも出入りすることも頻繁であった。学校外の様々な人の支援を受けた。警察官、保護観察官、少年調査官、裁判官、少年育成心理職、法務技官等にアドバイスを受けた。

図1からわかるように、暴力行為は減少したが、学校の雰囲気が良くならない。かえってぎすぎすして生徒たちの表情はすさんでいくように感じた。警察等と協力した「厳しい指導」だけではうまくいかなかった。私は「毅然たる態度」をはき違えていた。生徒は私に相談しなくなった。そのことを指摘されたのは、私が「厳しい指導の権化」と思っていた警察や司法の方々であった。「彼らの心に寄り添わないと解決しない」「彼らは事件で傷ついている。まずそこに向き合わないと解決しない」等の指摘であった。「生徒指導」を厳しい指導から、寄り添う指導に変換していくことで学校の雰囲気は少しずつ変わっていった。

さらに課題があった。実は、事件と向き合う時間を子どもたちに与えていなかった。前掲の新聞にも記載されているが、事件直後の大混乱の中、管理職から教育委員会の指示として「子どもたちにC先生の名前は極力言わないように」と伝えられた。今思うと、事件直後の混乱した状況での一時的な指示であったと思うが、その言葉を金科玉条のように無批判に守りつづけていた。

今でも彼らの不安定さの原因が殺傷事件なのかどうかはわからない。しかし、私がこれまで関わった中であれほど難しい学年はなかった。学校で先生が殺害され、多くが血まみれの先生を見ただろう。しかも、C先生はとても人気のある先生で、「C先生がいるから学校に行ってた」と話す生徒もいたほどだ。彼らが受けた影響の大きさは計り知れない。にもかかわらず、私は「暴力は犯罪」と言いつづけて、学校秩序の回復だけに尽力した。

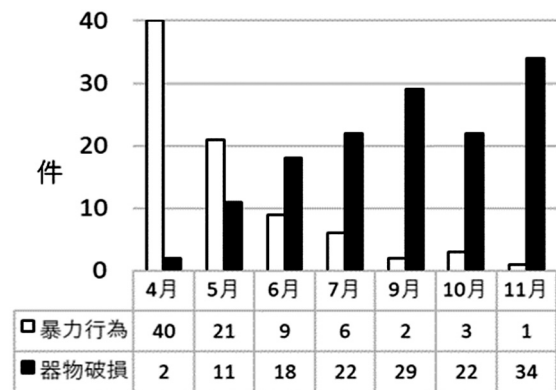


図1 月別トラブル発生件数の推移

生徒たちは、警察に通報され、法的に裁かれ、「鑑別所、保護観察、少年院…」等の言葉を聞くことで行動を変えた。そう推測される。その結果、すぐに見つかる「暴力行為」が激減し、変わって他に知られにくい「器物破損」が増加していったのだろう。

職員会議等で図1と同じグラフを提示すると、20代の女性教員から「グラフのあらわすことはよくわかる。さみしい心の行き場がない子どもたちを警察で脅しても無意味とっていました」「竹内先生は、トラブルを起こした生徒を叱ったり、謝罪させたり、一生懸命にやってくさっています、彼らがどうしてケンカしたり、殴り合ったりしたか、根本的な原因には無関心だと思っています」と言われた。このことが今でも忘れられない。1日に何件もトラブルが起きていたため、説諭して謝罪させるだけで精一杯で、彼女の言う通りの状況だった。反省した私は、2006年4月に起きた40件の暴力行為の対象者に「トラブルの原因」について、順番に聞き取りを始めた。

## 5 聞き取り調査

2006年12月、学校はやっと落ち着きを取り戻し、「生徒指導メモ」を頼りにトラブルの原因を探った。40件の半分以上が携帯電話に端を発したトラブルであった。当時はまだ中学生が携帯電話を持つことは珍しく、結果に驚いた。学年集会で、携帯電話を持っている生徒に挙手させる形で所持率を調べた。中学2年生と中学3年生は2～3割程度だったが、当該の中学1年生は8割を超えていた。学年集会での挙手での調査のため正確性は欠如するが、その理由を明らかにするため、中学1年生の生徒と保護者に聞き取りをしたが、よくわからなかった。ある保護者が「うちの子、夜に急に起きて泣き出すことがあるんです。事件のことを思い出すのかよくわからないんですが、ある夜急に笑い出したことがあったんです。心配になって、『何かあったらいつでも電話しておいで』と言っていました」と話してくれた。学校で先生を失った子どもたちの心の奥の、触れてはいけない部分だと判断し、それ以後、調査を止めた。しかし携帯電話の問題の向こう側に、彼らの悲しい思いやつらい経験があることがぼんやりとではあるが、強く私の印象に残った。

ただ、課題の多くが携帯電話に起因していることがわかった。早速、若手教員と一緒に携帯電話について調べた。「学校裏サイトが38000件」と文部科学省が報告して社会問題になったのは2008年で、当時はまだ子どもたちのネットでの暗躍は話題になっていなかった。そのため、私も勤務校の生徒の様子を見て驚くばかりだった。彼らは自分で「ホームペ（ホームページ）」「プロフ（プロフィール）」を作って、そこでやりとりしていた。そこでは匿名でやりとりができるため、「死ぬ」「殺す」等の言葉もよく書き込まれていた。

## 6 「禁止」から「支援」へ

事態を重く見た私たち教員は緊急に校内研修会を開き、生徒の携帯電話使用の実態について対策を協議した。生徒指導担当から「携帯電話の使い方の指導について」提案したが、「使い方指導をすると、学校として携帯電話使用を認めたことになる」という意見が出た。最初の指導は、朝礼で全校生徒対象に行うことになり、私から「携帯電話では多くのトラブルが起きています。中学生に携帯電話はまだ早いです。使わないように」と「禁止」を前面に出した指導を行った。その後、折に触れて携帯電話が抱える危険性について生徒に伝え、保護者集会や地域での集会等でも「極力、携帯電話を持たせないように」等の言葉を繰り返した。

しかし、禁止に舵を切ると生徒たちに大きな変化が起きた。それまでは生徒から携帯電話が絡んだトラブルの相談がよく寄せられたが、禁止宣言以降、ほぼなくなった。教員の一部も生徒や保護者からの相談に、「本校は携帯電話の所持を禁止しているので、携帯電話を持つから悪い」旨の回答をするようになった。教師の禁止宣言に全ての生徒が素直に従うと事態は改善するが、携帯電話はすでに生徒に深く浸透していたため、ほとんど効果は上がらず、逆に携帯電話でのトラブルは教師に見えなくなり、教師がわかったときは大きな問題に発展してしまっていて、混乱がより大きくなった。そのような状況下で、他の地域の学校とのトラブルが起きた。トラブルの場合、その初期に相談があり、教師を含めた大人が対応できたら比較的スムーズに解決する場合が多い。しかし相談がないと取り返しがつかないほどの事態に発展してしまう場合が多い。このトラブルは私たち教員にとって教訓になった。

主に生徒指導担当や管理職等で何度も話し合い、「禁止」から「支援」に方針を変えた。「支援」とは、生徒の携帯電話指導を生徒と一緒に考えていく方向性である。すぐに全校朝礼で生徒に話したが、携帯電話問題に否定的な態度をとっていた教師への警戒心は根強く残った。生徒会執行部や学級委員と何度も話し合いを持ち、彼らの声に全力で耳を傾ける姿勢をとった。生徒達も課題意識を強く持っていて、3回の話し合いの後、「生徒会として取り組みたい」意向を見せた。「アンケートで実態把握」「アンケート結果をもとに自分たちで話し合い」「話し合いをもとにみんなで対策する」という方向性で確認できた。

私は現在、「スマホサミット」等と称する、子どもたちが自分たちで自分たちのスマホ問題等について話し合う会を毎年30回以上、コーディネートしている。2019年には日本UNICEFと一緒に「UNICEF スマホサミット」を開催したが、これらの原型はこの時期にできた。

さらに、子どもたちは「寂しかったり、辛かったりしたら、メールやネットをやめられない」としきりに話していた。教員からも「メールやネットが悲しい心の逃げ場になっているのではないか」という意見がこのころ多くなってきていた。そこで子どもたちにとって楽しい行事を子どもたちと一緒に開催したり、彼らの自己有用感が高まる取り組みを継続的に実施したり、クラスや学年の居心地がよくなるような活動を増やしたりした。具体的には文化祭でのレクリエーション的な部分を増やしたり、学年ゲーム大会を実施したり、中学生が小学生を遠足に連れていったり、教員と生徒の二者懇談会を頻繁に実施したりした。

生徒会執行部の生徒達は自分たちで解決するために、生徒集会等での寸劇上映を提案した。「言葉でいくら言っても通じない。劇にして心に訴えたい」と言った。生徒たちは「メールのやりとりが延々終わらない」など、2〜3分程度のコミカルな寸劇を演じ、その後、「メールの使い方には注意しよう」「文字だけのメールは勘違いからケンカになりやすい」等のメッセージを伝えた。「みんな、本当は早くメールを終わらせたいと思っているから、そういう部分を訴えたい」と話していた。上演は成功で、見ていた生徒は「自分もメールやネットについて考えたい」という感想を多く寄せてきた。

さらに生徒たちは、「メールやネットの課題」に取り組んだ。彼らからは「なかなか終われない」「寝不足が多い」等の危機感が感じられた。事態を重く見た彼らは、「市内共通メール終わらせ言葉」を作る決議をした。1時間近くの議論の末「『返信不要』とメールの最後には書いたら、それでその日のメールはおしまい」というルールを作り、朝礼で伝えたり、生徒会新聞で訴えたりした。1か月後の成果報告会で各学校の生徒は口々に「全然広まらなかった」「全然ダメだった」と言っていたが表情は明るく「結果的に大成功」と言っていた。「終わらせ言葉は広まらなかったけど、メールをやめられなくてみんな困っていると分かったので、『もうやめよう』と言いやすくなった」と言う。このあたりにこの問題の答えがあると確信した。

つまり、メールやネットに対する取り組みは、①「子どもたち自身が話し合っただけで方向性を決めること」と②「彼らの心に直接支援する」、2つの方向性になっていった。そうすると、それまでいくら教師が頑張っ



でも減らなかったトラブルが急激に減少した。3か月程度の取り組みで暴力行為も器物破損もほぼなくなり、学校の雰囲気も格段によくなっていった。

ある程度方向性がわかった私は、その後、教育委員会指導主事になった。「自分の学校だけでなく、自分の属する地域全体の子どもたちへ対策することが自分の残りの命の使い方だ」という使命感が大きかった。

中学校での取り組みを全市的に広げていく使命感があった。異動1年目に「市中学生サミット」を全中学校生徒会執行部を構成員として立ち上げ、勤務校で行ったことを市単位で行った。学校単位の開催より難しいと予想したが、子どもたちの課題意識が高まり、その取り組みは「いじめ撲滅劇」の形で彼らの思いを劇にして市内の全中学生に伝えた。ネットに関するトラブルが減っていくのを感じるとともに、手応えを感じていた。

## 7 まとめ：ネットの問題は心の問題

私は5年間の指導主事勤務のあと、大学教員になった。一地区での対策だけではなく、我が国全体で取り組むべき課題だと確信してのことだった。その後、紆余曲折があり、現在では近隣府県だけでなく、熊本や茨城など、全国各地の子どもたちと「スマホサミット」に年間30回以上、取り組んでいる。また、この種の問題や課題を考える政府の会議の委員等の委託を受けているが、私が2005年からここまでの活動の中で中核にあるのは、「ネットの問題は心の問題」ということである。

今起きている「ネットでの出会いの危険」「ネットの長時間利用」「ネットでの誹謗中傷、いじめ」などの問題は、2005年当時から起きていた。そういう問題や課題に直面した子どもたちに丁寧に対応すると必ず、「心の問題」に直面した。家族の問題、友達関係、成績の不安、部活動でのつまずきなど、そのようなつらい気持ちの逃げ場としてのメールやネットを選ぶ子どもが多く見られた。もちろん、そればかりではないが、当時からその可能性を感じていた。

とかく「携帯電話やスマホ、ネットのデメリット」が強調され、禁止や制限を強く打ち出す場合が多いのが現実である。もちろん私も賛成で、子どもたちに何の制限もなく使用させることには反対である。危険性や課題について十分に理解させる必要を痛感している。しかしこれからの高度情報化社会を生き抜く子どもたちにネットを使わせないわけにはいかない状況である。

学校の状況では、生徒指導担当は禁止派が多く、情報担当は使用させたい派が多い。0か100かの議論が起き平行線である。私は0も100も子どもたちに無責任と感じている。30なのか70なのか、50なのか、そのあたりの議論がこれからの子どもたちのためには必要である。

ネットがあるから子どもたちがおかしくなるわけではない。もちろん、使いすぎる懸念や、危険に触れる機会が増えることも指摘できるが、多くの場合、「ネットの問題は心の問題」と考える。心に課題を持つ子どもたちが携帯電話やネットに逃げていく。私たちが向き合わなければならないのは、携帯電話やネットの危険性ではなく、携帯電話やネットにしか逃げ道を見つけない子どもたちの心にどう接していくか、である。

以上、私のこれまでの取り組みを振り返り、まとめてみた。このような原点から私はいろいろな取組をしてきたが、それを明らかにできた意義は大きい。これから先の研究に生かしていきたい。

**参考・引用文献**

- 1) 朝日新聞：大阪版 2005年2月15日朝刊 35頁.
- 2) 朝日新聞：大阪地方版 兵庫 2020年9月2日朝刊 22頁.
- 3) 朝日新聞：大阪地方版 兵庫 2020年9月3日朝刊 20頁.